



ピウスツキ蠟管と緊急地震速報チャイム

伊福部 達

私は戦後まもなく北海道沙流郡平取町にあるアイヌの聖地と呼ばれる「二風谷」で生まれた。当時の二風谷は 100 戸ほどの集落で、その住民の約7割がアイヌ系の人たちであった。そこにはアイヌの研究と医療に生涯を捧げたスコットランド出身のニール・マンローという医師がいた。

私の生まれた建物はその医師が住んでいた「マンロー邸」と呼ばれる三階建ての美しい白亜の洋館であった=写真=。マンロー医師の没後、縁あって私の家族が6年間にわたり借り住まいをしていた。



父(宗夫)は、その間にアイヌの重要な儀式である「熊祭り」に興味を惹かれ、その一連の流れやルールの詳細を村の古老たちから聞きだして、後に著書『沙流アイヌの熊祭』1969 として著した。私は物心がつく前に札幌の自宅に移ったが、その後も二風谷アイヌの人たちが時々来てくれたので、その村は何時までも私にとって身近な存在であった。

ピウスツキ録音蠟管の再生

今から、35 年ほど前、私が北大に勤めていた頃、「樺太アイヌ」の歌や音楽が録音された蠟管レコードがポーランドで 73 本も発見されたというニュースが入った。これはポーランドのブロニスワフ・ピウスツキという人類学者が 1900 年代の初頭に録音したものであった。ピウスツキはサンクトペテルブルク大学の学生だった時にロシア皇帝アレクサンドル3世の暗殺計画に連座して逮捕され、ロシア極東の樺太に流刑、つまり島流しにされた。この間、樺太アイヌの酋長の姪と結婚したり学校を造ったりして、樺太に溶け込んでアイヌの風習や文化を記録していたが、蠟管レコードはその中の一つである。

文字を使わないでアイヌ文化を伝えていたのだから、蠟管に録音されている歌や音楽はアイヌの歴史を知る上で極めて貴重な資料である。それを再生して欲しいという依頼が飛び込んできたのである。

それから半年にわたり悪戦苦闘の蠟管再生に取り組むことになったが、その過程と録音したピウスツキの数奇な運命は一つの貴重なドラマでもあった。NHK がこれに興味を持ち、半年間の再生過程は1984年に「ユーカラ沈黙の80年～樺太アイヌろう管秘話」と題したTVドキュメンタリー番組となった。

緊急地震速報チャイムの制作

この番組から 20 年以上が経過し、私が東大に移って間もなく、その番組のスタッフの一人が「僕のこと覚えていますか」と私の部屋を訪ねてきた。放送で緊急地震速報を出す制度ができたので、そのチャイムを作るのを手伝って欲しくないかと頼まれた。震度5弱を超える地震が予測されたら、直ぐに行動を促すようなチャイムを作って欲しいという。

色々な音が頭に浮かんだが、結局、ゴジラ音楽で有名な作曲家の叔父(昭)が作った交響曲「シンフォニア・タブカーラ」の第3楽章の出だしの和音を利用することにした。北海道で生まれ育った叔父もアイヌの音楽に強い影響を受けているが、この曲は興に乗った古老が立って踊り歌う「タブカーラ」をモチーフにしている。この中にある和音を抽出し、それを低音から高音に流れるアルペジオという形にしてチャイムにした。

それは、2011年3月11日の昼過ぎに「チャラン、チャラン」と全国にわたり執拗に鳴り響いた。

* * *

ピウスツキは 1903 年に平取に一週間ほど滞在した。これをテーマにして 2019 年秋に二風谷アイヌ文化博物館で特別展が開かれることになり、同館から「ピウスツキのろう管～アイヌ語音声の再生と活用」と題した特別講演を依頼された。迷った末、私が開発したポータブル蠟管再生機で蠟管再生の実演をしながら、ピウスツキが録音した歌と緊急地震速報チャイムを結び付けて一つの物語を作った。

二風谷、ピウスツキ蠟管、地震チャイムは私にとって逃れることができない「キーワード」になっている。(いふくべとおる、北海道大学・東京大学名誉教授)